文闘委通信 1

明大全学共闘会議
文学部闘争委員会
文学部 学生会 気付
連絡先
(467)4221
中大代々木寮

沖縄全軍労に続け！

▽安保粉砕・沖縄闘争勝利

第一回文闘委活動者会議議事録

「大学治安立法粉砕」のスローガンの下に結集した大学闘争の潮流は、文字通り日本階級闘争の歴史をぬりかえ、六九年后期の熾烈な闘いを経る中から今日の全ゆる学園ロックアウト体制＝正常化策動を自然崩壊せしめる莫大な階級情勢の地平をのぼりつめていった。まさに六七年十・八羽田斗争来つちかわれてきた反帝国際主義に貫かれる実力斗争の高い質は、六八年新宿騒乱闘争を経て、六九年一・一八一九の東大一月決戦に至っては、従来の個別改良主義斗争の枠を根底から切り崩す中から、明確に権力闘争をうちたて個別権力斗争へとその地平を昇めていったのであり、我々の全階級性を賭しての十一月一六、一七の佐ト訪米阻止闘争は文字通り十一月決戦にふさわしい日本階級斗争の歴史的段階を我々革命派の実体としてかちえたのである。まさしくそのひとつは、個別斗争が今后単に個別大学の斗いとしてかたずけられず、まさに日本階級斗争総体の中から、明確に安保沖縄にむけた政治闘争の観点から斗われなければならず、東大闘争についても単に東大闘争の枠内から全政治闘争をみるのは誤りであり、日本階級闘争を集中的に斗いぬいたのが東大闘争であったと我々は位置づけることができるのである。第二点は、全共斗運動の十一月決戦を至ての飛躍であり、とりわけ個別明大においても十一月決戦を明大全共斗三百の大部隊をもって斗い抜き、七〇年代今春季大攻勢を斗い抜く中においても、三里塚の現地闘争や全軍労支援闘争に至る過程において着々とその隊列を強化しつつあることをふまえるなら、全共闘運動こそ、六〇年代末葉の学生革命派の切り拓いた地平を飛躍させ、七〇年代を革命の七〇年代と認識しうるにふさわしい赤い糸の、すなわち「橋と弾」の役割を果して来たのであり、その日本階級斗争における赤い糸につらぬかれた明確な路線をまさに圧倒的大衆の信頼の下に一大統一戦線として斗いぬき、革命派と反革命派の激突の只中で、「共闘しつつ闘う」という原則をふまえて熾烈な党派闘争を展開する中から、単一な路線へと進軍をとげるであろうという確信をえたことである。

一、十一月決戦以后の運動

十一月決戦へとのぼりつめた六〇年代末葉の闘いで得られたわれわれ革命派の収穫は莫大なものであった。先に概略をのべたように、まさに七〇年代を革命の七〇年代と認識しえた我々革命派の斗いの地平は、今后の斗争が単なるスケジュール的な闘争では斗えず、日本階級斗争総体の中からその政治焦点として、一つ一つの闘争を斗い、それを至る中からさらなる隊列の強化と次の闘争への飛躍を勝ち取るという斗争へと深化せしめた。九・五の全国全共闘連合結成の内実も、当然の如く全共斗運動の斗いの質を変容せしめ、十一月決戦の死斗を至る中から、今后の全共斗運動とは、単なる党派の連合としてあるのではなく、まさに斗う革命派の大衆的規模をもつ一大統一戦線としての地平を切り拓いたのである。（后述参照）

ところで、八日未明より始まる沖縄全軍労の革命的斗いは、第一波四五時間スト―第二波百二十時間（実質一週間）ストを貫徹する中から、ますます不退転な、基地存在や沖縄人民の生活、土地産業等の本質的な斗争へと沖縄全人民へ燃え広がり、大量解雇、大量処分、配置転換（実質賃金格下げ）等の権力の弾圧をものともせず、安保沖縄闘争の第一波を先進的に斗いぬいたのである。

十一月決戦の意義としてのもう一方の、日米共同声明にみられる〈七二年沖縄返還〉という帝国主義的策動は、基地縮少どころか、さらなる沖縄の基地の近代化、整備を施し、その合理化の一環として、大量解雇の公然化に如実に示されるのである。アジアを中心にますます国際的な規模へと拡がりつつある階級斗争、民族解放斗争、反戦運動の昂まりは、彼ら日米帝国主義者を破産させ、沖縄を文字通りキーストーン・アイランド化しようとしている。

沖縄を「第二のベトナムへ！」今后の我々の斗いは、明確に、安保沖縄をメルクマールに斗いぬかれねばならないし、革命派と反革命派との絶対決は、街頭であれ、大学であれ、職場であれ、至る所で必至となるであろう。

基地をめぐる一切の矛盾を突出せしめた彼ら全軍労に連帯した斗いは、二、四の大統一行動にも示されたし、本土―沖縄一体となった安保沖縄斗争の昂揚は、米軍側の四百名解雇撤回や本土政府と屋良主席によって交わされる秩序派体制をものともせず、第三波ゼネストへと斗いぬかれるであろうし、我々は、沖縄の階級的性格からアジア国際革命への戦線は反帝国際主義の見地にたって、解雇粉砕―基地撤去、米軍政打倒！沖縄解放へとその闘いを[illegible]斗いぬかねばならない。

二、全共闘運動の位置付け

東大一月決戦を頂点としその地平の下に日々着々とその隊列の強化をはかってきた全共斗運動は「大学治安立法粉砕」のスローガンの下に、全大学でバリケード封鎖をもって敵権力に対決した。六・一五の労学市民をもってしての膨大な斗う主体性は、個別大学での矛盾を普遍的内容を有す全国的な斗いへと爆発し、広汎な斗う者の連合体として、九・五に全国全共斗連合結成へと至ったのである。その后、我々に一つの試錬が与えられた。我が明大に於ける十・九攻防戦以后の同様に、国家権力の手先となった大学当局のロックアウト体制下の正常化策動である。八・三の大学[illegible]の強行採決にもそもそもみられるように、大学[illegible]反革命性は明確に治安立法として権力の法的補の役割を果に至っても、一切の矛盾を解決しえず、権力のむき出しの弾圧下に、逆に「大学運命共同体」幻想の中へ押し込めんとする国家権力―大学当局の武器となったのである。しかし、我々の不退転の斗いは、八、四の大学立法粉砕にむけた全都緊急行動にもみられるように、たとえ学を失おうとも、全共斗運動の権力への叛乱は、革命の赤い糸をのぼりつめていったのである。

ところで、十一月決戦を圧倒的力量をもって、七〇年代への突破口を切り拓き、多くの同志を失いながらも、七〇年代を明確に革命の七〇年代として〈安保沖縄斗争の〉春季の大攻せをまきおこすにあたり、今后の日々連続した斗争は、単に六九年代の延長上に全共斗運動を位置づけて学園をバリ封したり、全共斗の武器をエスカレートさせたり、スケジュール的な今尚終始している現状を生むのであってはいけない。六九―七〇という夢想こそ単に学園を[illegible]る。一貫した能動的な斗いへの主体性は、日共＝民青のいう全共斗破産説（今では我々の圧倒的な隊列に驚き、全ゆる挑発行為や権力に癒着した告訴をもって我々の解体をはかっている）や一部日和見主義者の全共斗敗北説及び右翼反革命分子革マル（日和マルとよめ）派の全共斗野合説を自然崩壊せしめてきたが、もう一方において、我々は、明確に今后の全共斗運動の位置付けが必要となろう。

図 全国全共斗連合に象徴される全共斗運動は徒らな党派間連合ではなく、ましてや社共のよくやる斗いのための一時的な野合では決してありえない。全共斗運動とは、まさしく ①革命路線を前進する統一的統一戦線であり ②斗う大衆の結集体としての組織的表現であり ③（個々闘争を一つ一つ充分消化し、さらなる我々の闘争を発展させる原動力をつくるにあたっての）党的結集と党的指導の下における斗う大衆の階級形成の場であるといえよう。そして ④党―統一戦線の弁証法的統一の下、闘争への目的意識性への昂揚を勝ち取る場であらねばならない。

日帝の戦后支配政策を助け、それを多くの人民の前から隠蔽してきたポツダム民主々義に真向から対決し、全ゆるポツダム内的運動を自からの能動的斗いによって粉砕し、日帝の口骨な反革命的帝国主義的ポツダム体制強化＝ポツダム民主々義の右からの解体に対し左からの解体をはかる我々の斗いは東大斗争においては自らのポツダム内的日常性を否定するという自己否定の論理として現われその能動的な斗いを「帝大解体」として表わしてきた。こういった全共斗運動を通しての我々革命派による大衆の階級形成こそプロレタリア的階級形成に引きつがれるものであり、又一方における個別改良斗争のわくをのりこえ個別権力斗争に引き上げられた地平を、今后は日本階級斗争総体の中から個別斗争を安保―沖縄にむけた政治斗争の見地に立って斗う観点が必要である。

図 文斗委の強化発展を勝ち取ろう！

全ての文学部の学友諸君、今後の斗争はあの革命的な全軍労に呼応し、安保沖縄を中心に展開されなければならない。七〇年をめぐるところの日帝の侵略路線に対決してゆくことが我々全共斗の認ムだと考えます。

二月二日行われた文斗委活動者会ギの内容をのべてきたわけですけど、全ての学友がこのことをふまえて討論を行い文斗委の発展を勝ち取ろうではありませんか。全ての文学部の学友は文斗委に結集せよ。

〈スケジュール〉

二・一〇全共斗政治集会
2じ 和泉6番教室

〈メモ〉